

『青い夏』

作：前島宏一郎

『青い夏』 あらすじ

突如脈略もなく制定された「夏季休暇法」。
それは、選挙権及び定職を持つ成人全てに夏季休暇の取得を義務付ける法律。
これにより田舎に放り込まれた都会暮らしの女子ふたり。
ふざけた法律を作った国の考えにいちやもんをつけあった、
かつてのバイト先の先輩後輩。
無理やり始まった「夏」の体験。

しかし、ずっと飛び込んできた「夏」に、いつの間にか染まっていく。

いつまでも続くと思われた夏。
寂しさを纏いながら、別れを予感しながら、暮れていく。

『青い夏』
登場人物表

- | | | |
|---|--------|-----|
| A | 鯨岡チコ | (女) |
| B | 五町田あいこ | (女) |
| C | ばあちゃん | (女) |

声 よって本法案は、賛成多数により可決されました。

(拍手)

A それはだいぶ後になってから知ったこと。

B その法案は、選挙権及び定職を持っている成人全てに、夏季休暇の取得を義務づける法律。

A・B 夏季休暇法。

C 郵便です。

C はい。

C 夏季休暇法に基づく、召集令状です。

A・B …は？

C おめでとございます。

A・B 赤い服を着たポストマンは赤い通知を持ってそう告げた。

C 何がおめでとございますだよ。赤紙かつつーの。そのう

C え！

C 夏季休暇法。

A・B かきくけこー！に聞こえるだろ！

B などと言っていたその次の日。

A 私はカバンひとつを肩に下げ、見知らぬ土地にいた。

A・B 夏休み。

(セミンの声)

A・B ……うっさい。

A …あれ？

B ん？

(A・Bお互いを見合う)

A …五町田センパイ？

B チコ？

A マジですか？

B …びっくり。

B よく来たな。さ、こっち入り。

C …あ、どうも。

A ばあちゃんに手招きされて入ったのは…えっと、…かやぶ

A き屋根でできたっていう家。見たこともないような古い家

A の、縁側というところで、私は思わぬ再会をした五町田セ

A ンパイと、ふざけた法律を作った国の考えにいちやもんを

A つけあった。

B チコはピザ屋のバイトの後輩で、1年近く一緒にピザを焼

B いた。…それからすぐに私は資格を取り美容師になって、

B それつきりだった。まあフツの子で、強いていえば、ち

B よつと生意気だったけど、あの年代ってみんなそうだから

B ね。この4月に晴れてオフィスレディになったっていうの

B に、すぐにこんな田舎へ。まあ同情するね。

B おかえり。

A・B えっ？

C チコちゃんと、あいこちゃんねー。
A どうも。

B よろしくお願いします。

C こどもの頃って、何して遊んだー？

A えーと…アドバンス？結構ゲーム好きで、兄がマリオカー
C ト好きだったんでー。

B あたしはプレステが出た頃だけど、兄貴がセガ派で、サタ
A ーンだったね。まああたしはマンガばっか読んでたけど。

C 蝉取りは？

A は？

B セミ？

C しょんべんかけられたりは？

A まず、セミって、このうるさいの？

B いや、それくらいはわかるでしょ。

A だって聞いたことないじゃん。

B ー。確かに。

C 知らんのかい？

B しかもおしっこなんてするんだセミ。

A そりやすうでしよムシだもん。

B ムシっておしっこするの？

A わかんない。

B テキトーだね。

C ほれ、ミンミンゼミと、アブラゼミと、カナカナが鳴いて
A ー。

B え、セミってそんなにいるの？

C じゃあ…蝉からいくかい。
A …はあ。

B 私とチコは虫取り網を手に、庭に出た。

A なんだかどこまでが庭なのかもはっきりしないような庭に
B は、取り囲まれるようにセミの音が響いていた。

B 早速、近くの木を見上げてみる。立派な、ひのき…だと思
A う、多分。

C えっ？セミって木に止まって鳴いてるの？

B まさか、それくらいも知らないの？

A 鳴いて飛んでるんじゃないんだ。

B まさか…。だって、飛んでるの、見たことある？

A ない。でも飛ぶんでしょ？

B 多分ね。

A 頼りないなあ。

B 見たことないもんだって。

A 私は、じつと目を凝らし、ひのきと思われる木を見つめ
B た。

(A・Bじつと上を見る。)

A ー…

B チコ。あれ。

A え？

B あれじゃない？

A どれ？

B ほら…あそこにくぼみがあるでしょ、その左…

A あ？あーあー！！

B ほら、網。

A うん…

A・B 虫取り網を構えると、思ったより重くて、何故かどきどきした。

A・B …（網を動かす）

C ジジッ！！

A・B うわっ！！

B おしっこ…

A おしっこだ。

B うっわー！！

A ははははは！！

A 五町田センパイの顔を見て、何故か笑ってしまった。何故かわからないけど、自分だっておしっこ引っかけられたんだけど…おかしかった。

A・B 夏が…小さな夏が、私の中にずっと飛び込んできた。ついで、ぎゅっとしたくなった。あ、これって…夏だなんて、なんか思った。

B 気がつけば夕暮れで、くたくたになるまでずっとセミを追いかけてた。夕方にはカナカナの声しか聞こえないことも初めて知った。

（ヒグラシの声）

B コーラスのように何重奏にもなったカナカナの声。…ばあ

ちゃんは教えてくれた。

C 夕方鳴くから、ヒグラシって言うんだい。

B なるほどなあって…思った。

A・B そして、日が暮れて、闇がやってきた。

A 周りに明かりがないせいか、月の明かりがひどく明るく感じた。そして…

（間）

A （呟くように）…静か…

（間）

A 僅かに囁く風の音と、その音に鳴らされる草の音。どこまでも静かな夜。

B 「夏は夜」って…何だっけ？それを知らなくても、夏の夜はすごかった。格別だった。

C ささ、ごはん食べりー。

A はーい。

A いい匂い。

B ばあちゃんのつくった真っ赤なトマトを食べると、そのみずみずしさのひとつひとつが夏となって、私の中に入っていつてる感じがした。

A ひとつひとつが、入っていく。

…漬物も、煮物も、夏になって入っていく。
入っていく。

お勝手を出て、外にあるお風呂。自動的に半露天。

涼しい風が、滑らかな夏の匂いを運んでくれる。

蚊帳の中は、まるで秘密基地に隠れているような気分。

差し込む月明かり。

ばあちゃんの子守唄。

そしてまどろんでいく。

とんろりとろけるように。

そこからは、夢のような夏へと流される。

毎日が、夏。

裏山の川では、サワガニ取り。

(川のせせらぎの音)

カニなんて海にしかいないと思ってた。

大きな石をどかせば、ささっと動く。

その横をすり抜ける魚。

これはヤマメ。

本当？

だってばあちゃんがそう言ったもん。

じゃ間違いないや。

ふふっ。

毎日が、夏。

線香花火。

(線香花火の音)

縁側に腰掛けて。

夜の風に、髪を流され。

じっと、花火を見つめた。

(A・B線香花火を見つめる)

ジジ…ジジ…ジ…ぼっん。

あっ。

切なくて。

そしてふわっとした。

毎日が、夏。

夕暮れ。

(虫の声)

陽が西に傾くと、自然と力が抜けてゆく。

遠くで虫の声。

つい…うとうとと。

うとうとと。

(A・B身を寄せ眠る)

C そんな毎日が、いつまでも続く。いつまでも続く。それが
…夏。

あ…(目を覚ます)

(遠くで) 風邪引くぞー。

ありがとう、ばあちゃん。

ん…(寝返り)

ばあちゃんがかけてくれた毛布を、あいちゃんにかけ直
し、つつかけ履いて庭に出た。何度も見た夏の夕陽。心な
しか…力弱くなっている気がする。

その時、ばあちゃんの顔が浮かび、そして別の誰かの顔が
浮かび、捕まえたセミが、ヤマメが、線香花火が、次々と
通り過ぎていった。

何…

(間)

A ……びたりと、風が止んだ。

……

…目からぼろりと、こぼれ落ちた。

(囁くように) こぼれ落ちた。

B 時々、ふと寂しくなるときがありますか？

B それは…、生まれてから出会う、あらゆるものとの別れ
を、

A 予感して寂しくなるのだそうです。

A 真っ赤な空が…別れを、予感させたのです。

A チコ。

A …ん？

A とんぼ。

A …うん。

A …とんぼのめがねは、あかいろめがね…

A ゆうやけぐーもとんだから…とーんだーかーら…

(間)

C あいちゃん、チコちゃん。

A・B ばあちゃん。

C どしたー？

A ううん、何でもない。

C ごはんにすんぞ。

B うん。

C それと。

A ん？

C 話があつから。

B 話？

C さみしいけど。

C えっ？

C さ、食べりー。

A・B

こぼれそうな夕陽の中、私たちは…寂しさを纏った赤とんぼをかきわけるように、家に帰った。…こぼれ落ちないよ
うに。

C

あいちゃん、チョコちゃん。さみしいけど、あさって帰り
ー。さみしいけど…。

A

お国のお達しでという、ばあちゃんの聞き慣れない言葉を
聞く前に、わかっていた。

B

もう夏は、終わろうとしている。

A

毎日気の向くままに眠りにについていた二人は、
はじめて一緒に、この夏の思いを吐き出した。

B

膝突きあわせて。ほんとに近くで。

A

思えばこんなに話したことはなかった。
こんなに知らなかった。

B

当たり前だった風景。
当たり前だった時間。

A

当たり前だった肌触り。
当たり前だった匂い。

B

当たり前だから気づかなかった。
当たり前だ。

A・B

囁くような風の音。どこまでも青い空。どこまでも緑の草
に、唄うような川のせせらぎ。ばあちゃんはいつも笑って
て、線香花火はふわっとした。夜の月。抱き締められるよ
うにあたたかいばあちゃんのごはん。

A

……あいちゃん。

B

ん？

A

…思い出したの。

B

…

A

さっきのこと。

B

…さっきの？

A

ばあちゃんは、おかあさんみたいだ、って。

B

…

A

そしたら、ばあちゃん、…黙っちゃって。笑わなくなっ
ちゃって。

B

…

A

ねえ、あいちゃんのおかあさんって、どんな人？

B

…

A

…？

B

…

A

ごめん。

(間)

…チョコは？

…覚えてないの。

…？

仕事が、大変だったらしくて、早くに亡くなったって。

…

おじさんがそう言った。

…チョコ。

ん？

…おかあさんって、大切？

……わかんない。

…よね。

でも、ばあちゃんといると……そんな感じがした。

あたしも。

そう？

あたしも……おかあさんって知らないの。

えっ？

ばあちゃんといるとき、おかあさんも、こんなふうに夏は

駆け回ったりしたのかなって。

……うん。

あたしも、…あたしは。もしこどもができれば、教えてあげたいもん。セミの声も、土の匂いも、縁側の気持ちよさも、…ばあちゃんみたいなたかいかいごはんも。

…うん。

…ねえ、チコ。

…

…どこにいるんだろうね、おかあさん。

…

…どこにいるんだろうね、おかあさん。

(間)

…あいちゃん。

…？

ね。どこだろうね。私たちの、おかあさん。

(間)

…ね。

その夜、私はあまり眠れなかった。はじめてだった。こんなことは。ここへ来て。……空が白んでいく。それも、また、こんなにやわらかくて、こんなにきれいだなって、やっぱり知らなかった。

(足音)

？……ばあちゃんのつつかけの音…？

(間)

… (Bを起こす) あいちゃん。

…ん…？

ばあちゃん。

…？ (起き上がる)

まだ寝息を立てているかのようなぼんやりとした空と、ふんわりとした風の匂いに絡まれながら、ばあちゃんの後を追った。

ばあちゃんの顔はよく見えない。

B
A・B
けど、見える気がした。
今にもこぼれ落ちそうな。

C
…(墓の前で祈る) あんこら、今日で帰りーよ。…さびし
ーなるに。お前は、もつとだろーに…

A・B
朝霞の中、小さく呟くその姿は、もつと、ぼやけてゆく。
もつと、もつとぼやけてゆく。もつと、もつともつとぼや
けてゆく。こぼれ落ちるのを必死に持ちこたえている。ぼ
やけたその姿は…

(Cぼやつとした光を放つように、凜として立ってい
る)

A・B
……おかあさん…

C
…あいこ。

B
…

C
チョコ。

A
…

C
ごめんね。

A
おかあさん。

C
許してね。

B
おかあさん。

C
一緒に、過ごせなくて。…夏。

A・B
おかあさん!!

(間)

C
…なんだあ、あいちゃん、チョコちゃん。早いんでにー?

A・B
……ばあちゃん。

B
…そのお墓は?

C
…んー…

A
ばあちゃん。

C
親より先にいきよつて、親不孝もいとこだにー。

B
…

C
東京さ出ていって、何の音沙汰もなくてー…。何してたん

A
だかにー。

A
ばあちゃん。

C
…んー?

A
おかあさんは、ばあちゃんに似てた?

C
似とつたにー。

B
ホントに?

C
あいちゃん。チョコちゃん。あんたらにそっくりじゃ。

A・B
えっ?

C
ほんに可愛くて…。…ある時、ふらつと帰ってきたんじ

や。あー、何もかんも置いてきたんじやに、と、思った。

全部洗い流しにきたんじやに、と。いつのまにか、青白い

手になつとつて。それで、こう言うたんじや。

ここの夏は、青いよね、かあちゃん。ザーつと、どこまで

も青い空。若い…幼いころの気持ちとかが、そのまんまあ

る。ねえかあちゃん。…私の夏は、もう終わりーよ。赤く
なつて、暮れていく。ずっと…ずっと…青かったら、ええ
のんにねえ、かあちゃん…

A 今まさに終わろうとしている、夏の、最後の朝。

B どこまでも青い空。どこまでも青い夏。

A・B・C ぼろりと、こぼれ落ちた。

A (囁くように) こぼれ落ちた。

(雨の音)

B 座り込んだ三人の上から、この季節では珍しい朝の雨が降

り出しました。ばあちゃんの小さな小さな手は、青白く、

私は…おかあさんを…思いました。それから、私は、ばあ

ちゃんの髪を短くし、結び上げてあげました。ばあちゃん

は…若返ったと、喜んでいました。

A 時々、ふと寂しくなるときがありますか？

それは…、生まれてから出会う、あらゆるものとの別れ
を、

予感して寂しくなるのだそうです。

と、すれば…生きていることそのものが、寂しさなんじゃ
ないのかな。

ねえ、おかあさん…

A・B 雨が夕立になろうとした時、…ふわっと、…上がった。最

後の夏の空が…青から赤へと姿を変えた！！

A じゃあね、ばあちゃん。

C 声 じゃあにー！！

B …ねえ、チコ。

A 何？

B …あたしたちのおかあさんって…ばあちゃんの…

A あいちゃん。

B ん？

A いいんじゃない。どっちでも。

B ……そだね。

A 約束。

B ん？

A 来年も、来よう。ばあちゃんに会いに。

B ちゃんと有休でね。

A …うん。

A・B あの幼き青い夏の記憶は、焼きついて離れない。

C …すこーし、寂しくても。

A どれだけ経っても。そこにいる。

B 素敵な笑顔で僕たちを待っている。

A おかーえり。

A・B ……ただいま！！

END